

認知症高齢者について学ぶ機会とイメージ - 大学入学時にアンケート調査を実施して -

津 田 理恵子

Mental Images toward the Demented Elderly and Opportunity to know about the Demented Elderly

Rieko Tsuda

要 旨

認知症を患い徘徊で行方不明になっている者が1万人を超えている現状において、警察や地域住民が協力して徘徊による行方不明者を減らすことが望まれている。そこで、地域住民の一員である学童期・思春期の者が、認知症に関して学ぶ機会があるのかその現状を把握することを目的に、大学入学直後の学生71名にアンケート調査を実施し、その現状から今後の展望を導くことを目的とした。その結果、都道府県・市町村や卒業した高等学校の学科によって、認知症に関して学ぶ機会や認知症のイメージに差は見られず、認知症サポーター養成講座の受講は進んでいないことが明らかになった。そして、小中高の教育現場で認知症について学ぶ機会は少なく、認知症のイメージは否定的イメージをもっている者が多く、徘徊が疑われる人に遭遇した場合に声をかけることができないと答えた者が多かった。今後は、認知症高齢者を地域で支えていくために認知症に関心が持てるよう、認知症教育の必要性が広く国民に周知できるように啓発していくとともに、肯定的イメージに変化させるために、学童期・思春期から認知症について正しい知識をもたううえで認知症高齢者との交流を促し、不安にならない対応を習得することが必要である。このことにより、認知症になっても安心して生活できる地域作りにおいて、小中高生が大きな力になる可能性があること示した。

キーワード：学童期と思春期の認知症教育・認知症のイメージ
認知症サポーター養成講座・徘徊による行方不明

はじめに

社会福祉の動向 (2015)¹⁾ には、認知症を患った高齢者は増加の一途をたどっており、認知症高齢者は2005年時点で169万人と見込まれていたが、その後急速に増加し、2015年には250万人、

2025年には323万人に増加する見込みで、ピーク時には400万人近くになると推計されており、ひとり暮らしの認知症高齢者の暮らしをどのようにして支えていくかという視点が今後ますます重要になると記されている。その中で、警察庁の報告 (2015)²⁾ によると、全国の行方不明者の中で認知症やその疑いのある行方不明者として届けられ

た者が、2012年度に9,607人、2013年度に10,322人と対前年で7.4%増となっており、2014年6月には警察庁から全国の警察署に向けて認知症を患い徘徊で行方不明になったときは、地域住民と協力するなどして早期対応することが示された。しかし、2014年度の行方不明者は10,783人と前年よりも461人増加（未確認者168人）していた。

このように、認知症高齢者の増加が見込まれていた我が国の認知症高齢者に対する積極的な施策は、2005年からスタートしている。具体的には、認知症を患っても安心して暮らせるまち作りに向けて、認知症の啓発活動である認知症サポーターの養成が2005年に始まり、「認知症を知り地域を作る10か年」キャンペーンがスタートした。2009年には中間報告として認知症サポーターが100万人を突破し、2012年に認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）が策定され、2014年12月末には認知症サポーターが580万人となった。2015年に策定された認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）では、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現をめざし、2017年度末までに認知症サポーターを800万人まで増やしていくことが示された³⁾。

このように、認知症高齢者の増加に伴い徘徊による行方不明者も増加傾向にあるわが国では、地域住民が認知症の理解を深め、地域住民が警察署などと協力体制を組むなどして、徘徊による行方不明者を減らしていくための施策がすすめられている。その取り組みのひとつに認知症サポーター養成講座があり、これにより認知症について正しく理解し、本人やその家族をできる範囲で支援することを目的としている。この講座の対象は、地域住民、金融機関・スーパーマーケット・企業な

どの従業員、小学校・中学校・高等学校の生徒など地域に関係している様々な人である。

そこで今回、地域住民の一員として日中の多くの時間を地域の中で過ごしている学童期・思春期の者が、認知症サポーター養成講座を受講する機会や認知症に関して学ぶ機会があるのかや、認知症のイメージをどのように意識しているのかなどの現状を把握することを目的に、大学入学直後の学生にアンケート調査を実施し、その現状から今後の展望を導くことを目的とした。

I 研究方法

調査対象：A女子大学の社会福祉学科（卒業時に社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の国家試験から2資格の受験資格の取得が可能）1回生71名（3年次編入生は含んでいない）で、年齢は18歳から20歳で平均年齢±標準偏差は、18.1±0.4歳、性別は全員女性であった。

調査時期：2015年4月10日。2015年度入学生の筆者が担当する授業初日のオリエンテーションの時間を使用した。

調査方法：大学に入学するまでの期間に、認知症に関して学ぶ機会があったのかなど、認知症に関する意識を把握する目的で作成したアンケート用紙（表1）を使用した。アンケート用紙は、授業中に配布し自己記入方式、無記名で回答を求めその場で回収した。また、アンケート用紙を配布した際に、認知症サポーター養成講座を知らない学生がいることも考えられたため、認知症サポーター養成講座の目的や内容について口頭で説明した。

倫理的配慮：アンケート調査の目的・方法・予想される損害と効果、個人情報流出する恐れがないこと、アンケートの回答を成績に反映しないことについて、文書と口頭により説明し、文

表1 認知症に関するアンケート

認知症に関するアンケート

I 現在の年齢をお答えください。

II 卒業した高等学校の学科をお答えください。
例：普通科

III 小学校があった市町村をお書きください。

IV 中学校があった市町村をお書きください。

V 認知症に関する質問

1. 認知症サポーターの講座を受講していますか？（○をつけてください）
している ・ していない
「している」と回答した人は、いつ？どこで？

2. 認知症サポーターを知っていますか？（○をつけてください）
知っている ・ 知らない
「知っている」と回答した人は、どこで知りましたか？

3. 認知症サポーター養成講座を受講したいですか？（○をつけてください）
したい ・ したくない
理由：

4. 大学入学までに認知症について知ることにつながった経験を書いてください。
いつ・どこで・どれぐらい 例：小学校のときの、道徳授業で、1回習った。

5. 大学入学までに認知症について知っていた知識を簡単に書いてください。

6. 自分自身が認知症の人と接するとした場合、どのようなイメージをもっていますか？簡潔に表現してください。

7. 自分自身が家の近くで、徘徊が疑われる人と出会ったときに対応がわかりますか？（○をつけてください）
わかっている ・ わかっていない
声をかけることができると思いますか？（○をつけてください）
声をかける ・ 声をかけない
理由：

書による同意を得た。

分析方法：得られたデータはSPSS22.0を使用し記述統計処理を行い、基本特性と認知症に関する質問の比較はクロス集計処理による χ^2 乗検定（Pearsonの相関係数で有意水準5%以下を有意（両側））を採用した。自由記述回答は回答内容をカテゴリー化して整理した。

II 結果

1. 基本特性

卒業した高等学校の学科では、普通科が最も多く83.1%、次いで総合学科8.5%、商業科2.8%の順となっていた（図1）。小・中学校があった市町村では、46市町村の回答があり、兵庫県内の回答を神戸市と神戸市以外の兵庫県に分け、次いで多かった大阪府と中国地方、それ以外をその他として分類して整理した。その結果、最も多かった

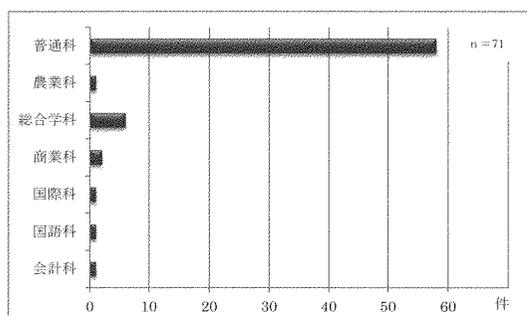


図1 卒業した高等学校の学科別人数

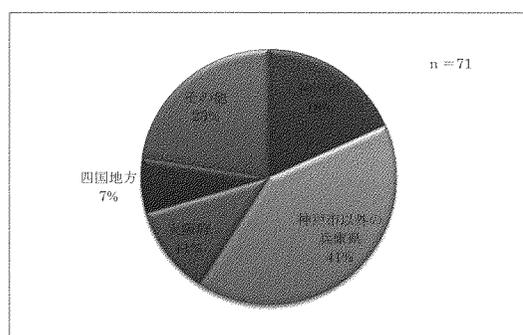


図2 小・中学校があった市町村

のが神戸市以外の兵庫県41%、神戸市18%、大阪府11%、中国地方7%、その他23%となっていた(図2)。

2. 認知症に関する質問

1) 認知症を学ぶ機会

(1) 認知症サポーター養成講座

表3 認知症サポーター養成講座受講希望有無の理由

n = 36

| | 人数(人) | 割合(%) |
|-------------|-------|-------|
| 受講を希望する理由 | | |
| 知識をつけたい | 11 | 15.5 |
| 将来のため | 8 | 11.3 |
| 認知症について知りたい | 6 | 8.5 |
| 興味がある | 4 | 5.6 |
| いざというときのため | 1 | 1.4 |
| 対応を知りたい | 1 | 1.4 |
| 福祉にかかわるため | 1 | 1.4 |
| 受講を希望しない理由 | | |
| わからない | 2 | 2.8 |
| 考えていない | 1 | 1.4 |

認知症サポーター養成講座は71名全員が受講していないと答え、認知症サポーターを知っていると答えたのが11.3%、認知症サポーター養成講座の受講を希望すると答えたのは60.6%であった(表2)。認知症サポーター養成講座受講希望の理由(表3)では、受講を希望する理由として最も多かったのが「知識をつけたい」で、次いで「将来のため」、「認知症について知りたい」、「興味がある」の順となっており、受講を希望しない理由では「わからない」、「考えていない」となっていた。

(2) 認知症を知った経験

大学入学までに認知症を知った時期(図3)では、71名中23名が無回答で回答のあった48名が知った時期の中で最も多かったのが中学校の21

表2 認知症サポーター養成講座に関する質問

n = 71

| 質問 | 選択肢 | 人数(人) | 割合(%) |
|---------------------|---------|-------|-------|
| 認知症サポーター養成講座を受講している | 受講している | 0 | 0 |
| | 受講していない | 71 | 100.0 |
| 認知症サポーターを知っている | 知っている | 8 | 11.3 |
| | 知らない | 63 | 88.7 |
| 認知症サポーター養成講座を受講したいか | 希望する | 43 | 60.6 |
| | 希望しない | 28 | 39.4 |

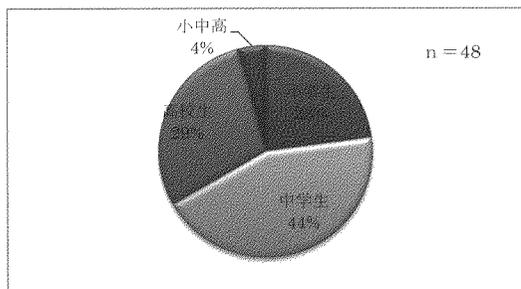


図3 認知症を知った時期

表4 認知症を知った経験
n = 57 (重複回答あり)

| 理由 | 人数(人) | 割合 (%) |
|--------------|-------|--------|
| テレビで見た | 22 | 38.6 |
| 身内に認知症の人がいた | 14 | 24.6 |
| 授業を受けた | 13 | 22.8 |
| ボランティア活動に行った | 5 | 8.8 |
| 家族から聞いた | 3 | 5.3 |

名、次いで、高等学校14名、小学校11名、小中高全とて回答した者が2名となっていた。認知症を知った経験(表4)は、48名中重複回答があり合計57個の回答があった。その中で、最も多かったのが「テレビで見た」が38.6%、次いで、「身内に認知症の人がいた」が24.6%、「授業を受けた」が22.8%となっていた。

2) 認知症のイメージ

(1) 認知症の知識

大学入学までに認知症について知っていた知識(表5)では、71名中65個の回答があり、学生の記載していた表現をもとに分類すると最も多かったのが「もの忘れをする」が32.3%、「忘れていくが増える」が15.4%、「感情の起伏が激しい」が12.3%、「わからなくなる」が10.8%、

表5 認知症の知識
n = 65 (重複回答あり)

| 知っていた知識 | 人数(人) | 割合 (%) |
|-----------|-------|--------|
| 物忘れをする | 21 | 32.3 |
| 忘れていくが増える | 10 | 15.4 |
| 感情の起伏が激しい | 8 | 12.3 |
| わからなくなる | 7 | 10.8 |
| 徘徊する | 6 | 9.2 |
| 短期記憶の障害 | 5 | 7.7 |
| その他 | 8 | 12.3 |

表6 認知症の人と接する場合のイメージ
n = 46

| | 人数(人) | 割合 (%) |
|---------|-------|--------|
| 肯定的イメージ | | |
| 相手に合わせる | 18 | 39.1 |
| 気長に接する | 3 | 6.5 |
| 否定的イメージ | | |
| 不安 | 9 | 19.6 |
| 大変そう | 5 | 10.9 |
| びっくりしそう | 2 | 4.3 |
| その他 | | |
| わからない | 7 | 15.2 |
| その他 | 2 | 4.3 |

「徘徊する」が9.2%、「短期記憶の障害」が7.7%、その他が12.3%となっていた。

(2) 認知症の人と接する場合のイメージ

認知症の人と接する場合どのようなイメージをもっているかという問い(表6)では、「相手に合わせる」が39.1%で最も多く、次いで「不安」が19.6%、「わからない」が15.2%、「大変そう」が10.9%、「気長に接する」が6.5%、「びっくりしそう」、「その他」が4.3%ずつになっていた。

3) 徘徊で行方不明者が疑われる人と出会った時の対応

家の近くで徘徊が疑われる人と出会ったときの対応がわかるかという問い(図4)では、「わからない」と回答した者が88.7%で、「わかる」と回答した者が11.3%となっていた。徘徊が疑われ

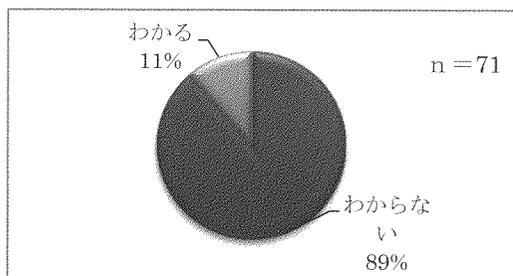


図4 徘徊が疑われる人への対応

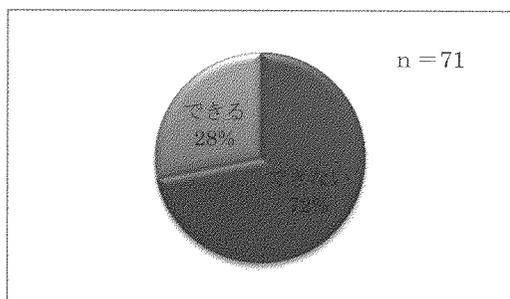


図5 徘徊が疑われる人に声かけができるか

る人と出会ったときに、声をかけることができるかという問い(図5)では、声をかけることが「できない」と回答した者が71.8%で、声をかけることが「できる」と回答した者は28.2%であった。声をかけることが「できる」と答えた者の理由では、「何とかしたいと思う」が10名、「対応できると思う」1名で、声をかけることが「できない」と答えた者の理由では、「対応が分からない」16名、「徘徊がわからない」7名、「怖い」4名となっていた(表7)。

3. 基本特性と認知症に関する質問のクロス集計

卒業した高等学校の学科と小・中学校があった都道府県・市町村の基本特性によって、認知症に関する質問の回答に差があるか確認してみたが、

表7 徘徊が疑われる人と出会った時の対応の理由

n=38

| | 人数(人) | 割合(%) |
|----------------------|-------|-------|
| 声をかけることができると答えた者の理由 | | |
| 何とかしたい | 10 | 26.3 |
| 対応できる | 1 | 2.6 |
| 声をかけることができないと答えた者の理由 | | |
| 対応がわからない | 16 | 42.1 |
| 徘徊かわからない | 7 | 18.4 |
| 怖い | 4 | 10.5 |

認知症を学ぶ機会や認知症のイメージに有意な差は認められなかった。

Ⅲ 考察

1. 認知症を学ぶ機会

地域の中で日中の時間を過ごすことが長い学童期・思春期の者が、認知症を患い徘徊で行方不明になる高齢者と地域の中で遭遇する可能性もあり、小中高生が認知症サポーター養成講座の受講対象者として国からも示されている。その中で、その実施状況が高等学校の学科や小中学校がある都道府県・市町村によって差があるのかを確認する目的で比較してみたが差は認められなかった。このことから、高等学校の学科や小中学校のある都道府県・市町村に関係なく、認知症を学ぶ機会や認知症サポーターに関して周知されていない現状が明らかになった。

具体的には、認知症サポーター養成講座は全員が受講しておらず、認知症サポーターという言葉を知っている者は71名中8名にとどまっており、認知症サポーター養成講座がスタートして10年経過した現在においても、地域住民の一員として学童期・思春期の者に認知症への理解を深めるための、認知症サポーター養成講座を受講するための環境は整っていないことが確認できた。その理由として、小中高の教育現場における教員が、学童

期・思春期に認知症に対して理解を深める必要があると認識していないことが考えられる。その根本には国が示している認知症施策が広く国民に周知されていないことや、地域福祉の推進を担っている行政サイドから、教育現場への働きかけが不足していることも考えられる。

一方で、アンケート聴取の際、質問内容として記載していた認知症サポーターについて口頭で説明を加えたうえで、認知症サポーター養成講座を受講したいかを質問した結果、71名中43名が認知症サポーター養成講座を受講したいと答え、認知症の知識をつけたいなどの理由を答えていた。このことから、認知症サポーター養成講座が広く周知され、小中高で受講できる環境が整えば、受講者は増加していく可能性があるといえる。

細川・金子・前田他（2009）⁴⁾らは、小学校の総合学習の時間7コマを利用して、認知症サポーター養成講座を実施した成果として、認知症の主人公の不思議な行動の意味やその時の気持ちなどを考えることができたことや、養成講座受講後に高齢者の情緒的イメージ尺度において、総合的に肯定的イメージに変化していたことを報告している。村山・小池・倉岡他（2013）⁵⁾は、認知症啓発事業を小中学生に実施し、実施後に認知症高齢者のイメージについて調査を行った結果、「認知症高齢者のイメージ」は「記憶障害」、「言語障害」、「病気」、「不安・焦燥」となっていたと記し、小中学生の認知症について理解が深まったことを示している。

このように、小中学校で認知症に関する講座を開催し、認知症の理解を深めるための取り組みによる成果も報告されていることから、今後は地域住民の一員である学童期・思春期の者を対象に、認知症について正しく理解できるような働きかけが重要といる。また、今回は大学入学時の学生か

らのアンケート調査しか行っていないことから、今後は、小中高の教育現場の教員の認知症教育に対する意識や、小中高における教育現場での認知症教育の実態とともに、行政からの小中高への認知症教育の働きかけの実情についても把握していくことが重要といえる。そのうえで、学童期・思春期に認知症について正しく学ぶ機会のひとつとして、認知症サポーター養成講座を受講できるような環境を、地域間格差なく行政や教育機関と協力して作っていくことが必要といえる。

また、大学入学までに認知症について知る経験があったと答えた48名の理由では「テレビで見た」が最も多く、次いで「身内に認知症の人がいた」となっており、身近な生活の中の出来事を通して認知症について知る機会があり、「授業を受けた」と答えた者は13名にとどまっていた。このことから、現状では認知症について知る機会は、小中高の教育機関よりも各家庭における環境や個人の体験が主になっていることが明らかになった。さらに、「授業を受けた」と回答していた13名の自由記述欄には、小学校では道徳、中学・高等学校では家庭科、トライアルウィーク、ボランティア活動などの授業で知ったと答えていた。このことから、小学校では道徳の授業、中学校・高等学校では家庭科の授業を活用して認知症教育が行える可能性があると思えることができた。

さらに、久木原・内山・阪本他（2011）⁶⁾は、老人クラブの高齢者に認知症に関するイメージについて調査を実施した結果として、認知症に対して「恥ずかしい」と答えた人は、受診に対しての抵抗があったとし、認知症に対する正しい知識を周知することが必要であると記している。このことから、現状においては認知症について学ぶ機会は、個人の体験に頼っている側面が強いが、認知症について正しく理解できることで、認知症が

恥ずかしい病気であるという国民の意識が好転する可能性もあり、学童期・思春期から広く国民が認知症について正しく理解できるような、学ぶ機会の工夫が必要といえる。

2. 認知症のイメージ

大学入学までに認知症について知っていた知識では、「忘れる」や「わからなくなる」など記憶障害に関するものと、「感情失禁」や「徘徊」などの周辺症状に関する回答がほとんどを占めていた。このことから、大学入学までの体験や授業を通して、イメージの中に認知症の知識として定着しているのが、認知症の障害の一部に関する知識であると捉えることができた。

木村（2008）⁷⁾も、地域住民を対象に「認知症と聞いてイメージすること」を自由記述で調査した結果、「物忘れ」、「記憶障害」といった中核症状、「脳萎縮」、「アルツハイマー」、「老化」といった病気・病態、「徘徊」、「人格破壊」、「抑うつ」などの周辺症状が主な内容であったと記しており、今回の調査結果と同様の傾向が確認できた。

さらに、認知症の人と接する場合のイメージでは、「相手に合わせる」と、認知症高齢者との関わり方について回答した者が最も多かった。しかし、「不安」、「大変そう」、「びっくりしそう」などの否定的イメージの回答が34.8%に上っており、実際の関わり方に不安を抱えていることが読み取れた。

道繁・奥山・杉野（2013）⁸⁾が実施した看護学部の学生に対する認知症高齢者に対するイメージの調査結果の中でも、学生は認知症高齢者に対して否定的イメージを持つ傾向にあったと示しており、柴田（2007）⁹⁾が、短期大学女子学生と女性介護職員に認知症に関するイメージと知識について実施した調査結果では、介護職員のほうが短期

大学生より、認知症高齢者についてよりよく知っており、そのことが認知症高齢者に対するイメージに影響し、短期大学生よりも介護職員の方が認知症高齢者のイメージは肯定的であったと示している。

このことから、認知症のイメージは認知症に対する知識がない方が否定的イメージをもつ傾向にあり、否定的イメージを抱えていることで自信を持って認知症高齢者と関わることができないと意識していると捉えることができた。そのため、認知症について正しい知識を多く持つことで、認知症高齢者へのイメージは否定的イメージから肯定的イメージに変化していく可能性があると思えることができた。

さらに、奥村・久世（2009）¹⁰⁾が実施した、大学生への認知症高齢者と健常高齢者のイメージの調査結果では、大学生は健常高齢者に比べて認知症高齢者に対して否定的イメージをもっており、高齢者のイメージには、親や祖父母の望ましい態度や身近なかかわりが影響する可能性があるとし、人格を形成する過程での様々な高齢者との柔軟なかかわり体験や、世代間の思いやりのある交流などが重要であると述べている。柴田（2011）¹¹⁾は、教職のための介護等体験に参加する学生を対象に実習前後に調査を実施し、介護体験の多いの方が、認知症高齢者とのコミュニケーションの可能性を感じており、それが介護する効力感につながっていると示唆している。このことから、認知症高齢者のイメージを、否定的イメージから肯定的なイメージにかえていくには、身近な家族の存在や学童期・思春期における認知症高齢者との交流体験が影響を与えるといえる。

ここで、認知症カフェで認知症高齢者と小学生の交流を試みた事例を紹介すると、小学生は認知症高齢者が話す昔話に興味を持ち、素直に質問す

ることもできていた中で、認知症高齢者の思いを自然に受け止めることができていた。この場面から、大人は固定観念で認知症という病気や障害を捉え、頭で考えたうえで対応する傾向があるが、小学生は病気についての深い知識がない中で固定観念もなく、ごく自然に認知症高齢者と交流でき、成功体験を得ることができる可能性を感じた。

以上のことから、認知症高齢者のイメージを否定的イメージから肯定的イメージに変えるには、認知症の病気や関わり方について正しい知識をもつための教育だけではなく、認知症高齢者との交流を促す中で成功体験が得られるような教育内容の工夫が必要といえる。このことにより、認知症高齢者と自信を持って関われる可能性があり、認知症で徘徊により行方不明になる可能性がある高齢者に会った際も、躊躇なく行方不明になるのを防ぐための声かけができる可能性がある。

3. 徘徊による行方不明時の対応

認知症の人が徘徊により年間1万人を超えて行方不明になっている現状の中で、家の近くで徘徊が疑われる人と出会ったときの対応が「わからない」と63名が答えていたが、徘徊が疑われる人と出会ったときに、声を「かける」と答えた20名の理由のほとんどが「何とかしたい」となっていた。木村・石川・青木(2013)¹²⁾も、大学生が抱く認知症高齢者のイメージについて調査を行った中で、学生は認知症高齢者と何らかの関わりを持つとうとするということがわかったと示している。このことから、対応がわからない中でも学生は、認知症で徘徊が疑われる人と遭遇した場合、声をかけて行方不明にならないように、何とか対応したいと考えていることが読み取れた。

一方、徘徊が疑われる人に遭遇した場合、声をかけることが「できない」と答えた27名の理由は、

「対応がわからない」、「徘徊がわからない」、「怖い」という回答であった。このことから、認知症の障害や対応について理解できていないことや、実際に認知症高齢者と関わり成功体験がないことが、自信を持って対応できない不安につながっていると捉えることができた。

認知症の周辺症状の一つである徘徊は、精神的に不安定になると悪化することも考えられており、徘徊している高齢者に会った時は、その人の気持ちに寄り添い、精神的な安心が得られるようなごく自然な「笑顔」で、落ち着くような「コミュニケーション」を図ることが大切で、その対応で行方不明になることを防ぐことができる。その反面、精神的に不安定になることを助長してしまう、「こわばった表情」で「尋問のような問いかけ」をすると混乱を招き、暴言や暴力などの周辺症状が出現する可能性もある。こういった周辺症状の悪化に対して、「怖い」などの感情を抱いていることが考えられる。そのため、認知症の人が不安にならないような、相手の気持ちに寄り添った対応が可能になるような学びを得る機会が必要といえる。

一方で、大澤・松岡・百瀬他(2007)¹³⁾は、中学生以上の住民に認知症に関する調査を実施し、若年者の認知症への関心の低さと、認知症の人との関わりに困惑している実状を報告している。このことから、地域住民の一員として日中地域の中で過ごす時間が長い小中高生に、認知症についての関心が高まるような働きかけが重要といえる。

これらのことから、小中高生の認知症への関心を高め、認知症で徘徊している人が安心できる対応が可能になるような学びを得る機会が必要で、そうすることで、地域の中で認知症を患い徘徊により行方不明になった場合でも、行方不明者の早期発見に結び付くだけでなく、徘徊による行方不

明者を減らすための地域の中での大きな力となり、認知症になっても安心して生活できる地域作りにつながる可能性がある。

まとめ

地域住民の一員である学童期・思春期の者が認知症に関して学ぶ機会があるのかなど、現状を把握することを目的に、大学入学直後の学生に認知症に関するアンケート調査を実施した結果、出身校がある都道府県・市町村や卒業した高等学校の学科によって、認知症に関して学ぶ機会やイメージに差は見られず、これらの現状から、1. 認知症について学ぶ機会、2. 認知症のイメージ、3. 徘徊による行方不明時の対応の3点について今後の展望を導いた。

認知症について学ぶ機会では、大学入学までの期間に認知症サポーター養成講座の受講が進んでいない状況や、認知症について小中高の教育現場で学ぶ機会が少ないことから、認知症高齢者を地域で支えていくための認知症教育の必要性が広く国民に周知され、小中高の教育現場においても認知症サポーター養成講座を取り入れるなどの教育環境を整えていく必要がある。

認知症のイメージでは、否定的イメージを抱いている者が多かったことから、肯定的イメージに変化させるために、学童期・思春期から認知症の病気や関わり方について、正しい知識をもつことができるように教育内容の工夫に加え、認知症高齢者との交流を促していくことが必要である。

徘徊による行方不明時の対応では、自信を持って声をかけることができないと答えた者が多かったことから、地域住民の一員として日中地域の中で過ごす時間が長い学童期・思春期の者が、認知症への関心を持ち認知症の人が不安にならない対応を習得することで、認知症になっても安心して

生活できる地域作りの中で、大きな力になる可能性がある。

しかし、今回のアンケート調査の結果から導いている展望は、調査対象が全国規模の調査ではなく、本学社会福祉学科入学生のみを対象であることから対象に偏りがあることや、学生サイドにのみ調査を行っており、小中高の教育現場や、地域福祉を担う行政には調査を行っていないことを考慮しておく必要がある。

先行研究においては、認知症のイメージや知識についての研究報告は多数あったものの、認知症に関して学ぶ機会になった時期や場所について、調査を実施している報告は見当たらなかった。そのため、「認知症を知り地域を作る10カ年」キャンペーンがスタートしてちょうど10年目である2015年時点で、認知症サポーターへの周知が進んでいないことや、学童期・思春期に学ぶ機会が少ないことを示すことができたことに、一定の成果があったといえる。

今後は、今回導かれた展望の実現に向けて取り組んでいくとともに、小中高の教育機関と行政にも聴き取り調査を実施し、教育機関と行政の実情を把握するとともに、教育機関や行政と協力して、認知症になっても安心して暮らせる地域作りを目指していきたい。

謝辞

本研究の趣旨を理解して、ご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 社会福祉の動向委員会編集：社会福祉の動向，中央法規出版，255，2015.
- 2) 警察庁生活安全局生活安全企画課：平成26年中における行方不明者の状況，3，2015.

- 3) 佐藤通生：認知症対策の現状と課題，国立国会図書館調査及び立法考査局社会労働課，846，11，2015.
- 4) 細川淳子・金子紀子・前田充代他：A 小学校の総合学習に「認知症」学習を取り入れて，石川看護雑誌，6，53-58，2009.
- 5) 村山陽・小池高史・倉岡正高他：認知症啓発事業が小中学校の認知症高齢者イメージに及ぼす影響，日本認知症ケア学会誌，12(3)，593-601，2，013.
- 6) 久木原博子・内山久美・阪本恵子他：高齢者における「認知症」に関するイメージと知識，看護学統合研究，13(1)，16-21，2011
- 7) 木村典子：一般住民の身近に認知症高齢者がいた場合の対応に関する意識，愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要，43，89-94，2008年
- 8) 道繁祐紀恵・奥山真由美・杉野美和：老年看護学教育における認知症高齢者への看護援助に対する教授法の一考察，山陽論叢，20，15-20，2013.
- 9) 柴田雄企：認知症高齢者に対するイメージと認知症の知識，大分県立芸術文化短期大学研究紀要，45，21-28，2007.
- 10) 奥村由美子・久世淳子：大学生の高齢者イメージに関連する要因，日本福祉大学健康科学論集，12，31-38，2009.
- 11) 柴田雄企：短期大学生の高齢者イメージと認知症高齢者イメージ，大分県立芸術文化短期大学研究紀要，48，131-143，2011.
- 12) 木村典子・石川幸生・青木葵：大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因，東邦学誌，42(1)，75-87，2013.
- 13) 大澤ゆかり・松岡広子・百瀬由美子他：地域住民の認知症に対する関心と不安およびイメージの検討，愛知県立看護大学紀要，13，9-14，2007.